



寄贈資料の中から 菓子木型

菓子木型は、落雁^{らくがん}などの干菓子や、こなしなどの生菓子を打ち出すための道具です。美しい菓子を作るために、鶴亀や鯛などの縁起物や、四季折々の植物や風物といったさまざまな意匠のものが彫られています。

木型には、大きく分けて一枚のもの、二枚を合わせて使うものがあり、主として一枚型は薄く小さな菓子を、二枚型は厚く大きな菓子を作るのに使われます。二枚型のうち、下側の意匠が彫りこまれている方を台といい、上側は下司板^{げすいた}といって、菓みに厚みをもたせるため意匠の輪郭が彫りぬかれています。板同士は竹ダボで合わせるようになっています。木型の材料には丈夫で狂いの少ない桜の木が適しており、ノミを使って彫りますが、同じ分量の菓子ができるように、

また、型から抜けやすいように工夫されています。

菓子の作り方は、落雁の場合、餅米や麦の粉に少量の水をさし、しっとりしたところへ砂糖を加え、混ぜ合わせた材料を台に詰めて下司板をかぶせ、さらに材料を詰めます。乾いたら型から取り出し完成です。

写真左上の型は鯛で、お祝いや見舞いの品によく使われました。中央の羽子板状の型は植物や動物、丸型や家紋、文字などが彫られ、同じ柄の菓子が一度にたくさんできます。また、柄違いのものもあります。右下の型は少し特殊で、上面と側面に柄が入った円柱形の菓子ができます。蓮の図案が彫られており、仏事のお供え用です。一番右下の型は波や松葉、杵など板の表裏両面にそれぞれ違う図案が彫りこまれています。

駿河湾の漁

足立 実さんの漁話

海に面していない国でのアワビの話

海に面していない甲斐の国（山梨県）で、「アワビの煮貝」が名物になったのは、沼津や伊豆の海で採れたアワビを、「山越商人」と呼ばれる人達が沼津から搬送したことは、前号で述べた。

甲斐の国では、魚介類は駿河の国（静岡県）や相模の国（神奈川県）等に頼らざるを得ない。

現代と異なり、冷凍技術や交通手段が発達していないため搬送に日数が掛かり、腐敗を防ぐため塩や醤油に浸けるなど加工し、馬の背に積んで、沼津、御殿場、



籠坂峠、船津（河口湖）から御坂峠を越え、黒駒から荷場車に積み替えて運んでいた。

沼津から甲府まで、3～4日は掛かったであろう。その間、漬け込んだ醤油が丁度よくアワビに染み込んだのが「煮貝」の始めと言われていた。

現在のような「煮貝」が、何時頃からあったのか、明らかではないが、江戸時代にはあったように、当時は「煮鮑」とも書かれていた。

その当時でもアワビは高価であり、加工はするが、なるべく生の風味を味わいたい、と色々

工夫し、現在の製法になった、と言われていた。

アワビは、表の色で青・赤・黒と3種類があり、沼津や伊豆周辺では、最も上質の青アワビが採れる。

採れたアワビは、殻付のまま漁場で軽く蒸して甲府に送り、これを「煮貝」にするが、生の風味を生かし

つつ作ることが最も難しいそうだ。

珍味といわれる「カラスミ」は沼津が発祥の地であるが、「煮貝」も沼津五十集84人衆の誰かが工夫して、甲州へ搬送したものであろう。

こうして海に面していない甲斐の国で、海の幸である「アワビの煮貝」が名物になった。

山越商人は貝の他にもいろいろな海産物をも運んだ。

信濃の国（長野県）の名産に「寒天」があるが、原材料である天草は沼津から運んだものだ。沼津では水が張るようなことはあまり無いが、信濃の国は厳しい寒さが寒天づくりに適していて、名産となった。

このように、海産物で沼津から全国に広まったものは多い。

甲斐の国には沼津から塩も運んでいる。

前回も触れたが、当時の沼津の湊は狩野川の川湊であり、強い西風が吹くと、砂が堆積して船が入ることができず、千石船などの大きな船は江の浦湾に停泊して、舳で荷物を河岸まで運んだ。

沼津の塩商人が瀬戸内海等で買い付けた塩を積んだ千石船も、江の浦湾に停泊して荷卸しをしている。

江の浦には大型船が停泊した時の船宿もあり、塩を積んだ船が停泊すると、若い人達が中心となり、舳で運んでいる。

塩もアワビと同様、沼津～御殿場を経て、籠坂峠、御坂峠を越えた、と言うならば理解できるが、舳で何処へどうやって運んだのか、最初はわからなかった。

調べたら、富士川は流れが早く砂も多いため、当時の幕府の命令で新しい水路を岩淵の方に通し、引き船で鰍沢の岸壁に荷物を上げ、ここから陸路で運んでいた。

以前、鰍沢には今でも塩蔵が残されている、との話を聞いたことがあるが、一旦、そこに保管され、甲斐の国はもとより信濃の国まで運ばれたのであろう。

この船運は、海産物等を甲斐の国に運ぶと共に、甲斐の国の米等を運び出す大切な交通手段であった。

口野でも一時、塩を積んだ船が停泊地となったことがある。

塩を積んだ船は、停泊すると、鱸綱料というものを払う。この鱸綱料は現金ではなく、塩一俵につき3%程度の現物（塩）が支払われ、塩を作ることができない田方の人達に売った。

現在の籠坂峠

富士・沼津・三島 三市博物館共同企画展「あそび歳時記」から

10月1日～12月7日まで、富士・沼津・三島三市博物館共同企画展を開催しています。

三市の博物館が一つのテーマで企画し、お互いの収蔵品等を展示するもので、今回は四季折々の遊びから生活の移り変わりを見たものです。

今回展示されている中の幾つかをご紹介します。

たてばんこ 立版古（富士立博物館 蔵）

立版古は、江戸時代から明治時代にかけて流行った遊びです。

1枚の紙に描かれた絵柄を切り抜き、設計図に沿って組み立ていく、いわば「紙で作った立体模型」です。



立版古（富士立博物館 蔵）

「立版古」の「版古」は錦絵などを表す「版行・板行」に由来している、と言われています。

出来上がった作品は、夏の夜、夕涼みの床机に蝋燭を灯して飾った、と言われています。描かれる絵は主に歌舞伎の名場面が多く、今回展示してあるものは、明治33年（1900年）に印刷された「歌舞伎座新狂言 曾我兄弟討入りの場」です。

軍人将棋（三島市郷土資料館 蔵）

明治時代の日清・日露戦争の影響を受けた遊びと考えられ、一般的には駒を動かす人2人と審判の3人で遊びます。

駒はあらかじめどの駒がどの駒に勝つか、決められています。

遊び方は、自分の駒を対戦相手にわからないよう裏返して置き、お互いの駒が同じ升目でぶつかった時、審判が両方の駒を確認し勝ち負けを決めます。もし同じ駒同士がぶつかった場合は、引き分けになります。

負かした駒は自分の駒として再び使用することはできません。



軍人将棋（三島市郷土資料館 蔵）



おかんじゃけ（沼津市歴史民俗資料館 蔵）

おかんじゃけ（沼津市歴史民俗資料館 蔵）

「おかんじゃけ」は静岡県独特の玩具で、真竹を二節の長さに切り、一節を根気よく叩き、繊維を糸状に裂き、赤、黄、緑、紫等の色で三色に染めたものです。

「おかんじゃけ」という名称は「お下げ髪」が転訛したものという説もありますが、定かではありません。遊び方は、女の子は姉様遊びや髪結い遊び、人形遊びに、男の子は合戦ごっこかつせんの采配さいはいや相撲の軍配に使ったと言われています。

静岡市のお寺の開山忌には、昔、近隣の農家が厄除け、招福の縁起物として作り売っていたそうで、今でもその時期になると、売られているそうです。

資料館からのお知らせ

歴史講座を開催(11月16日)

朝晩も冷え込み、御用邸記念公園から見る富士山も頂きが雪化粧に替わり、冬本番、を迎えた今日この頃です。

さて、11月16日(日)に図書館4階の視聴覚ホールで「歴史講座」が開催されました。

「歴史講座」は、昨年度までは「郷土史講座」として開催していましたが、より幅広い分野の講座を、という皆さんのご希望に応え、名称も新たにリニューアルしたものです。

今回は日本人形博物館・日本招き猫館の植山利彦館長さんをお迎えし、「カラクリ人形とおもちゃ」をテーマに講演をうかがいました。

植山さんは、ご自身の貴重なコレクションの中から、幾つかの珍しい人形をお持ち戴きました。



茶運び車

鯨のヒゲのバネと歯車を利用して人形がお茶を運ぶ「茶運び車」、水銀を利用した重心の移動で台の上をゆっくりと段返りしながら下りてくる「段返り人形」、優雅な調べと共に、大輪のバラの花の中から可愛い女の子が顔を出す「オルゴールカラクリ」など、私達が普段

見ることが出来ない世界各国の珍しいカラクリ人形を目の前で実際に動かし、その様子を大きなスクリーンに映して仕組みを判りやすく説明されました。

参加された皆さんは、人形の動作に感嘆の声をあげ、なかでもIT技術を駆使し、頭や尾を動かし、お手の動作や鳴き声まであげる「ネコのカラクリ人形」にはすっかり感心され、カラクリの世界を満喫していました。



この猫ちゃんがカラクリ人形？

体験学習「たこづくり教室」を開催します

12月7日(日)、体験学習「たこづくり教室」を開催します。

かつては、お正月にはあちこちで凧をあげている子供達を見かけましたが、今は、そうした風景を見かけることも少なくなりました。

今回の「たこづくり教室」は、小学生(4年生以上)～中学生を対象に、武者絵の昔懐かしい和風の凧づくりに挑戦し、出来上がった凧は、皆で揚げてみます。



義経

ごあいさつ

今年も残り僅かとなりました。

まさに光陰矢の如し、過ぎ去って行く歳月の速さを感じます。

この一年間、歴史民俗資料館の事業にご協力を戴き、本当にありがとうございました。

職員一同、心より御礼申し上げます。

寒さはこれからが本番です。

皆様、十分ご自愛下さい



沼津市歴史民俗資料館だより

2008.11.25 発行 Vol.34 No.2 (通巻183号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/rekimin/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.shizuoka.jp